

# 白氏文集 四十七 松 聲

かとうじゆんべい  
加藤淳平

白樂天、名は居易が詩文集は、生涯の親友元稹の編緝せる「白氏長慶集」なり。同集の樂天の詩、一に諷諭、二に閒適、三に感傷（「感じ傷む」の意、現代邦語の「感傷」とは異なれり）その他に分類せらる。こは白樂天自身が自詩の分類ならむ。これまで諷諭詩、感傷詩（長恨歌、琵琶行等）は紹介したれば、最後に閒適詩數篇を紹介せむ。閒適とは閑を樂しむ意なれば、閒適詩には、樂天が日々の生活を知る喜びあり。本日の「松の聲」、詩人の未だ若く、翰林學士として皇帝側近にありし頃の作なれど、夜半に獨り坐し、松の聲に聴き入りて心體脱落せるを詠ふ。生涯佛教の信仰深き樂天なれば、已に若くして佛教的境地に没入せるを窺ふ可し。

松聲

松の聲

月好好獨坐 月好く 獨り坐するに好し

雙松在前軒 雙つの松 前の軒に在り

西南微風來 西南より 微風來たる

潛入枝葉間 潛かに 枝葉の間に入りて

蕭寥發爲聲 蕭寥として 發して聲を爲す

半夜明月前 半夜 明月の前

寒山颯颯雨 寒山 颯颯の雨

秋琴泠泠絃 秋琴 泠泠の絃

一聞滌炎暑 一たび聞けば 炎暑を滌あたらひ

再聽破昏煩 再び聽けば 昏煩を破る

竟夕遂不寐 竟夕 遂に寐いねず

心體俱翳然 心體 俱ともに翳然

南陌車馬動 南陌に 車馬動き

西隣歌吹繁 西隣に 歌吹繁し

誰知茲簷下 誰か知らむ 茲ここの簷下

滿耳不爲喧 滿耳 喧を爲さざるを

（大意） 好い月である。獨り坐つてゐる私には特に好い月だ。前の軒先には雙つ並んだ松が立つてゐる。西南の方角から微かな風が吹いて來る。氣が付かないうちに風が枝葉の間に入って、ぞつとするやうな寂しい物音を發する。この夜半、ここでは明るい月が照つてゐるのに、向ふの木の葉の落ちた山では颯颯と音を立てて、雨が降つてゐるのだろうか。それとも秋のこの夜に誰かが琴を弾き、冷たい弦をつまびいてゐるのだろうか。この音は、一度聞けば晝の間の厳しい暑さを洗ひ落とし、もう一度聽けば心の憂ひや思ひを消すことができる。夜通し到頭寐ずに過ごした。心が身體から脱落したかのやうだ。南の街の通りでは車や馬が通つて行き、西隣りの家ではしきりに歌を歌つたり笛を吹いたりしてゐる。しかし誰が知るだろうか、ここの家の簷のまはらの下に坐つてゐる私の耳には、すべてが靜かで、聞こえ

て来る物音は何も喧ましいとは感じられないことを。

(令和元年十一月二十日受附)